

第8回国土交通中部地方有識者懇談会

「まんなか懇談会」

(第8回議事録)



平成16年9月24日開催

- 水谷 研治 委員（中京大学教授） -



日本全体を牽引する可能性を持つ中部地方において、基盤整備のさらなる充実が求められる。

この地域は今大変に注目されていて、日本の中でも一番活気のある地域だと思います。来年もさらにそれを加速する要因がたくさんあるのですが、「まんなかビジョン」にもありますように、この地域における10年先、あるいは20年先を考えた場合に、我々が何をすべきかが非常に重要だと思います。

そうすると、産業にしる、観光にしるそうなのですが、実際に中心となって行動していくのは民間でして、問題なのは民間が活躍をするための基盤整備です。基盤整備の点については、この地域は大変進んでいる。万博を契機として、随分進んだのですが、さりとて現状の段階で果たして十分かと言いますと、これは決してそうではないと思います。

途中まで基盤整備ができてはいるものの、完成してはいないものが多くあります。たとえば東海環状道路があります。東半分はどうやらできそうですが、ではその西半分はどうなっているのか。それから、東海北陸道もあります。これも今後どうなるかということなのですが、長い目で見ますとこういった基盤整備はやはり、どこかの段階で強力に推進していきませんか、なかなか現実のものにならないだろうとっております。そのときに、この地域は現在かなりよいのだから、まあいいではないか、ここまでやってきたから、あとは他の地域より後回しにしよう、という動きが出てくるのではないかと私は懸念しているのですね。

そういったことを考えてみますと、日本全体として、今後、発展していく産業はどこに立地するかといったことを考えますと、北海道から九州、沖縄まで満遍なく産業が成り立つかということ、私はそう思わないのですね。それぞれ、自分たちの場所でもっとしっかり産業育成をしてほしいという要望はあるのですが、それが全て成り立つとは限らない。だとすれば、日本全体でも可能性を持った、限られた場所が全体を引っ張らないと日本はやっていけないのではないかと。むしろ日本は世界の中で取り残されるのではないかとという危惧を持っております。

- 奥野 信宏 委員（中京大学理事・大学院教授） -



名古屋周辺地域における状況変化が起きている。

中部圏を広域圏としてどう捉えるかということについて、もともと東海圏もそうですし、中部圏、北陸まで入れるともっとそうなのですが、なかなかまとまりがない地域である、言い換えれば、それぞれの地域がそれぞれの個性を持っている、と言われております。

その中で、地域の役割ということについて、この地域では大きな変化が起こってきていると感じています。まず、先ほどの水谷委員のお話にありました通り、この地域は非常に元気なのですが、これを仔細に見ていくと、特に元気な所と、そこそこ元気な所とがあるのですが、特に元気な所は、実は、西三河、豊田から岡崎、それから幸田のあたりです。このあたりは実際に歩いてみても大変によいところです。非常にいい街が名古屋大都市圏の周辺にできはじめているという印象を持っています。日本の他の地域とは随分違

う景色が展開してきている、ということが大きな変化のひとつだと思います。

それから、名古屋周辺地域における、もう一つの点は、岐阜や四日市などの都市が名古屋との関係を強めつつあることです。悪く言えばベッドタウン化してきているということなのですが、その中での摩擦といいますか、環境の調整に苦しんでいることが見て取れると思うのです。

名古屋は周辺地域の発展を受け止める機能を中心部に整備すべき。

現在、商業機能が名古屋に集中しつつあり、周辺で展開している産業と、小売機能、アミューズメント機能といったものを受け止める機能が名古屋に必要なのだと思うのですが、その場合に、名古屋の機能として、今、何が足りないかということを考える必要があると思います。本社機能を名古屋へ移転することについての調査があるのですが、それを見ると名古屋圏から名古屋市内に本社機能を移したいという企業が非常に多いのです。では、そうした中枢機能を支えるような機能が名古屋市の中心部にあるかということ、それはこれからの課題だということところが随分あるのではないのでしょうか。

たとえば国際スクールについては、志段味にアメリカンスクールがありますが、名古屋にはそこしかありません。豊橋のあたりに外車の日本本社が随分立地しています。外国からそこに転勤してくる方がいらっしゃるのですが、学齢期の児童を持った外国の方はなかなかそこに勤務することができない。話を聞きますと、そのような社員の方は名古屋駅のあたりに住まわれて、子供は志段味のアメリカンスクールに行き、お父さんは新幹線で名古屋から豊橋に通ってらっしゃるそうであります。

おそらく、今後、名古屋駅一帯にいろいろな機能が集積してくると思います。トヨタの海外部をはじめ、それに関連したものが集積しつつありますので、国際学校のみならず、ホテルやコンベンション機能などの都市機能はますます必要になるのではないかと。これからの名古屋は、そういった周辺の発展あるいは変化を受け止めるような機能を中心部に整備していかなければいけないと感じています。

新幹線をはじめとする社会基盤が効果を発揮するのは、これからである。

広域連携についてですが、この地域の交通基盤を考えた場合、私は「高速性」と「快適性」が必要なのだろうと思います。日本は随分経済発展してきたのですが、その経済発展の過程で私たちは何を手に入れてきたかということ煎じ詰めれば、それは2つあるだろうと思います。ひとつは、高い所得。もうひとつは、長い自由時間だと思うのです。

高い所得については、個人所得では世界でも最も高い所へきています。また、長い自由時間ということでは、1960年頃の全産業の平均労働時間は年間2,560時間くらいのはずなのですが、それが1990年代に入りますと大体1,950時間になりまして、今は1,850時間のところになっていると思います。また、平均寿命も長くなっていて、日本人は随分と長い自由時間を手に入れてきたのですが、それを可能にしたものについては、いろいろな要因があるのですが、一つの基盤は「移動の高速性」と「移動の快適性」だったのであるかと思っています。

その「高速性」と「快適性」を実現した20世紀後半の最大の社会基盤は新幹線だと私は思っていますが、これまでそれを最大限に利用できたのが名古屋であり、新幹線というものが名古屋地域の概念を変えた、つまり、新幹線によって、それまで一つの閉鎖社会であった名古屋地域が活動の拠点に変わったという非常に大きな効果を持っていたのだと思います。

しかし、私は名古屋で新幹線の効果が出てくるのは、本当はこれからではないかと思っています。中部国際空港ができて、高速交通網ができ、それらとの相乗効果で新幹線の効果もこれから発揮されるのではないかと。たとえば、名古屋には国際会議や国際的なイベント用の会場施設がないということがよく聞かれますが、そういったハードのものが名古屋に整備され、さらにそれだけでなく、研究機関、教育機関などにも一級の人たちが集まり、ソフト的なものについても名古屋に整備されますと、また新幹線の効果も出てくるのではないかと思うわけです。

- 松尾 稔 委員（（社）国立大学協会専務理事（財）科学技術交流財団理事長） -



「テイクオフ中部2005」においては、何をどのように取り組むのか、成功事例などを示しながら具体化する必要がある。

まず、大局的な視点からまず申し上げますと、社会資本を考える場合、「短期」というのは20年くらいの期間をして短期と言うのであって、「中期」というのは40～50年、「長期」といえば100年先までを見据えて考えて行かなくてはいけないと思います。これは私が前から主張していることなのですが、そうしますと、短期というのはこの「テイクオフ中部2005」で示されている期間よりはもう少し長いのではないかと。もし2008年くらいまでを言うのであれば、むしろこれは工程表と言わなければいけない。

この頃ロードマップという言葉が流行っているようですが、実際に具体例として何をやるかを作り、成功の事例を見せる。広域連携であれば、連携を深めるために何が優遇策として必要か、あるいはまちづくりのために必要かということを考えていく。たとえば、三重県にシャープを引っ張ってきたときにもいろいろな優遇策があったのだとは思いますが、そういった事例を示すことが必要です。

拠点都市間を結ぶ幹線インフラの整備と、それぞれの拠点都市が機能特化して連携を図ることが重要。

それから、ネットワーク、まちづくり、広域連携の場合、拠点都市の機能を特化していくことが重要なのではないのでしょうか。これは、言うほどには簡単じゃないことは、百も承知です。しかし、やはり国土交通省を中心にした国がリーダーシップを取られて、知事やそのまわりの人を動かして、思い切って各拠点都市の特長を特化していくくらいの気持ちが必要ではないかと思えます。そして、拠点都市の間を、将来の孫の時代ではなく、余力のある現在のうちに幹線インフラで結んでいくことが非常に重要ではないかと思っております。

- 箕浦 啓進 委員（中日新聞社メディア局長） -



名古屋や中部地方が本当に言われているほど強いのか、今一度考えてみる必要がある。

数年前まで私たちが万博や空港の話をするときは、2005年の開催・開港後、中部地方は果たしてどうなるのか、2005年の後に起きるかもしれない不況、あるいは万博の跡地をどうするかという議論をよくしていたと思うのですが、最近、そういった議論がほとんどなくなっています。中部地方

は、現在非常に元気がいいから、そういったことを心配しなくても、このままの勢いが続くだろうといった雰囲気になっているのではないかと少し心配しています。

十数年前に日本にすごい勢いがあったとき、ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われていましたが、最初の頃はおそらく皆そんなことは思ってなかったと思うのです。それがそう言われ続けるうちに、だんだん自分たちもそう思ってしまって、その後バブル崩壊を迎えたという経験があります。当時、まさかあの後、バブルの崩壊が来るとは全員思ってなかったわけですね。

名古屋がそれと同じだとは言いませんけれど、そういうようなことを考えますと、本当に名古屋は強いのか、これから先も強いのか。それを一度、真剣に考えてみる必要があるのではないかと思うのですね。

中部地方において、名古屋の地元経済・地元資本が地盤沈下を起こしている恐れがある。

そして、もう一つで心配していることがあるのですが、現在、名古屋が非常に元気がいいということもあって、東西から多くの資本が流入してきています。特に流通関係については非常にたくさん入ってきています。その中で、名古屋の地元資本の流通・金融というのは、おそらく相当地盤沈下しているのではないかと考えています。今は景気がいいからあまり目立たないのですが、これが平常時に戻ったときに、端的に言えば街中の商店とかも含めてですが、流通・金融分野については名古屋資本がずいぶんと少なくなってきたのではないのでしょうか。

「まんなかビジョン」の中にまちづくりについていろいろな施策・事業があるのですが、名古屋の一つの大きな特徴は、地元資本が温存されていて、名古屋財界というものもしっかりとある、そのような地域だったのではないかと思うのです。それが、ある時気がついたら、名古屋の都市は福岡や札幌と同じように、ホテルもデパートも金融も、地元資本ではなくて東西の資本になってしまっていた。そのようなことになるのではないかと懸念しています。

将来、自動車産業時代に次ぐ新たなモノづくり産業の育成も視野に入れるべき。

この地域を短期・中期・長期と分けて考え見ると、短期はおそらく、そう大きな変化はないかもわかりませんが、中期になりますとかなり変化があるのではないのでしょうか。たとえば、産業について、モノづくりはこの地域の一番の基盤として残ると思います。ただ、前から言われていることですが、この地域は自動車産業一辺倒となっている。もっと極端に言えば、こここのところは自動車産業というよりもトヨタ自動車依存ということが非常に強くなってきています。ご存じのように、どんな産業でも、どんな企業でも、永久に栄えたためしはありませんので、いずれその次の産業を考えなくてはいけない。むしろ十数年前の方が、ポスト自動車産業時代において、何をしていくかということをよく議論したのですが、最近ではそういう議論もほとんどされなくなっている。自動車産業が元気がなくなった後、どうなるのか。モノづくりといっても、その中味がどうなっていくのか。おそらく自動車に次ぐ新しいモノづくりの産業を育成することを考えていかななくてはいけないのではないのでしょうか。

今後の日本は余暇生活がより充実する方向へ向かう。観光分野については、産業と同等、あるいはそれ以上に重視してもよい。

産業でもう一つ言えば、先ほど申し上げました中部地方の流通・金融産業について、特に名古屋の流通・金融がどうなるかによって、周辺の地方都市との連携も変わってくるのではないのでしょうか。その辺りを見通して、広域連携も含めて考えていく必要があるのではないかと思います。

また、これから日本はさらに成熟した資本主義社会になっていくと思いますので、働くだけではなくて、むしろ生活のしやすさ、また、いろいろな所へ遊びに行くという、余暇生活を充実したものにしていくという方向が大事になってきますので、観光という分野については、産業と同等、あるいはそれ以上に「テイクオフ中部2005」の中でページを割いて書いてもいいのではないかと思います。

- 小笠原 朗 委員（日本政策投資銀行東海支店長） -



大局的な視点から見た国内外の課題も中部地域の社会資本整備政策の基礎に据えるべき。

3点ほどお話しさせていただきたいと思います。1つ目は、「少子高齢化」や「財政制約」、最近よく言われていますが「地球規模での競争激化」といった現状の認識について、政策を考えていく上での基本的な部分に置かれてはどうかと考えています。例えばまちおこしという観点で个性的な地域のプロジェクトを実行していくということは非常に当然だとは思いますが、その一方で、規模の経済性や、国際的な競争力をどうやってつけていくか、といった大局的な課題も非常に大事だと思っています。都市の個性を發揮するばかりに、ちまちましたものをあちこちで展開して屍累々みたいな話になってしまうことは、やっぱり地域にとって非常に大きなロスなのかなと思います。これが一つの大事な視点ではないかと思っています。

どのように地域資源を活用していくか、また、どのよう分野間の連携を進めていくかという視点が重要。

それから、いま申し上げた3つの基本的な現状認識に立ちますと、水谷委員もおっしゃったようにこの地域にはいろいろな分野で地域資源が充実していると思いますので、今すでにあるものをどうやって活用していくかというような視点が大事かと思っています。

例えば、地域連携という部分ですが、これもまた、既存資源ということなのですが、いわゆる各地に産業クラスターとか、あるいは具体的に言いますと工業団地、こういったものが、すでにたくさんあるかと思うのですけれど、空いている部分がまだまだたくさんあるかと思っていますので、こういったものをどのように活用していくかという視点も非常に大事なのではないかと。また、地域の中で産業とまちづくり、教育とか医療とか福祉、いろいろな分野で、もっと情報交換を密にするという意味での連携が必要なのかなと考えているところです。

民間企業や外国からみた地域の課題も把握する必要がある。

満足度調査を住民の方を対象に行われたそうですが、例えば、民間企業がこの地域のどのような所を評価しているのかということや、何について不満を持っているかといったところにも掘り下げたりサーチをされるべきではないでしょうか。外国の方々がこの地域に関して、たとえば教育の問題とか、外国の方から見た地域の課題についても考えていく必要もあるのかもしれない。

ソフト面も含めた、本物志向の観光客の要求に応えられるような観光地の整備が必要。

観光については、これもフレーズとしてはあちこちにあるかもしれませんが、「学び」というテーマが重要だと考えております。観光客が本物志向になってきて、もっと本物を学びたい、見たい、知りたいと思うようになってきている。そういう人たちを受け入れる上で、案内する側も

っとプロ意識を強化した、本物を案内できることのできるレベルの高い観光ガイドみたいなものがソフトの部分として必要なのではないかと考えております。例えば、この地域は歴史、文化、自然にとっても恵まれていると思うのですが、豊かだから、単に紹介してどうぞ来てくださいというのではなく、そこからもう少し踏み込んで、来てくれた人に対して、非常に満足度の高い案内ができるような方々を養成することもまた大事なのかなと考えています。

須田座長が常在観光と仰っていたと思うのですが、まずそもそも住む人が自分の街のよさを本当に認識する必要がある。もしそれを認識できてないのであれば、まずは住んでいる人がその土地の素晴らしさ・魅力を勉強する。そのような視点が大事なのではないかと考えております。

- 谷岡 郁子 委員（中京女子大学学長） -



センスのない地域は観光地域になり得ない。中部は素材のよさを活かすだけのセンスが足りないのでは。

まちづくりという視点で、女性雑誌などによく取り上げられる街について、考えてみますと、まず、東京、大阪はもちろんとして、神戸、札幌、場合によっては高山や金沢などがよく載っています。こういった町は雑誌に取り上げられる頻度が名古屋よりもずっと高い。つまり、名古屋が「おしゃれ」だと思われていないという単純な事実がそこにあるわけです。

では、おしゃれでない地域は観光地域たり得るのか。私は、答えはノーだと思います。和辻哲郎の例を引くまでもなく、私は風土が人を作っていると思います。子供は急に大人にならないわけですし、観光客である大人というのは実は、非常にセンスよく遊ぶ子供みたいな存在、あるいは、センスある環境の中で育まれた子供なのだろうと考えています。

例えば、アユのおいしさということについて、足助あたりの川で捕れたアユの方が京都あたりのアユより素材としてはよいのではないかと考えるのですが、どちらへ食べに行くかという、たぶん京都へ食べにいくってしまうのですね。それは蓼酢が出てこないという単純な理由なのです。私はアユを食べるなら蓼酢がある方がおいしいと思ってしまうわけです。あるいは、魚で言いますと伊勢湾の魚はすごくおいしいのですが、瀬戸内海あたりの神戸や大阪の料亭で食べることにこだわってしまったりするの、ちょっとした薬味であったり山葵であったり、素材を引き立てるものに違いがあるということだと思っております。

山、川にしても、それから食べ物にしても、中部という地域は素材的には本当にすごいと思うのですが、それを魅力的に見せるセンスがない。そのようなセンスがないところに果たして観光は育つのだろうか。

オリンピックの関係があったものですからアテネにしばらく滞在したのですが、ギリシャを見てきて思うのは、古代ギリシャ人はすごいセンスのある建築を建てたのだな、ということです。パルテノンにしても何にしても、あれがセンスのない建物だったら私たちはこれほどありがたがりしないわけだろうし、あれを救うために世界遺産なんていうものができたりはしなかったんだろうとってしまうのですね。

美しい国土をつくっていくためには、センスを持った「国土マインド」が必要。

しばしば機能や具体論の問題から入ってきますと、センスという部分が忘れられてしまうのだけれども、センスということ成り立たせないと美しい国土というのが出てこないのではないかと。美しい国土というのは要するに国民の国土に対するセンスみたいなものが非常に高いレベルにあるということなのではないでしょうか。私は、実は江戸時代の方が今の日本よりは高かったのではないだろうかと考えています。というのは、幕末に日本にやって来たイギリス人、アメリカ人、フランス人たちが残した日記や手紙には、これほど美しい街、これほど美しいたたずまいを見せる海岸や山里は世界のどこにもないのではないかと、さんざん書いているのです。それはおそらく江戸時代の日本人が普遍的に世界中にアピールできる国土を形成する力、すなわちセンスがあったからであろうと思うわけです。そのような議論を飛ばして、何を作るとかどうい政策をやると言ったところで、本当に美しい国土というものは育っていくのだろうか。

私は、美しい国土や環境を作っていくためには、やはり、「国土マインド」のようなものを形成する必要があるのではないかと考えています。しかし、文科省も環境省もそんなことは考えてなくて、環境省は稀少種がどうだとか生態系がどうだとかそういう問題を考えるわけですし、文科省は全然違う発想で、何を覚えてなくてはいけないみたいなことを考えているわけです。

私は、国土交通省がそのような問題を考えなければ、きちんとした国土マインドを持つ子供はできないだろう、正しい地域マインドを持つ子供もできないだろうと思っています。例えば、国交省が川関係で水辺の楽校というのをやっているわけです。水辺の楽校のプログラムを見せてもらったのですが、これは環境省のどこかで見たぞとか、林野庁なんかでこの辺のことをやっていたぞとか、あるいは文科省でこんなプログラムを見たぞという感じで、非常に他省庁の内容と似ている。国土プロパーらしさといったところが全然見えてこないのです。「国土マインド」とは生物学という問題でもないし、ただの生態系でもなくて、国土というものの、城の石垣などを含めて、様々なものを作ってきた総合的なセンスみたいなものです。センスが悪ければ、白鷺城という名前が姫路城に付いたりするわけがないわけですし、誰もお城へ見にいこうとも思わないわけです。

世界に誇る「国土マインド」の形成に向けて、人づくりもしっかりやるべき。

子供たちがお砂場遊びから始めて、「ごっこ」でいろいろなものを作っていき。そういった遊びから、「土木マインド」や「建築マインド」というものが作られていくのだらうと思います。子供の頃に国土ごっこ、土木ごっこも、建築ごっこもやらないで、急に大学へ入って建築学科とか土木学科へ行くということには非常に問題があるのではないのでしょうか。

例えば、水辺の楽校をわざわざやるのであれば、そこで土木工事の真似事や仮設建築的なものを作らせる。そして、その限られた空間にあっても、そこを美しくしたり、しかし自然に逆らわないようにしたり、そして安全であったりする力みたいなものを少しずつ教えていって、街の原型であったり国土の原型であったりするものとちゃんと触れるようなことを子供達に教えていく必要がある。これをもし国交省がやっていかないのであれば、一体どこの役所がそんなことを考えるのであろう、と私は思ってしまうわけです。

長い目で見た場合、人のレベル以上の国土になることは絶対ないと私は思っていますし、人のセンス以上の街になることはないと思っています。人のレベルが高くなるためには、百年の計と先ほど松尾先生がおっしゃいましたが、それにマッチした形の施策とおそらく世界一の国土セン

スを持っていたかつての国民性を取り戻すということと一緒にやっていかなければいけない。そういったことがなければ、いろいろな公共事業を考えようとしても、この右下がりの時代に美しい国土をちゃんと確保したり、美しい街を確保していくために人々がお金を出してくれたり、あるいは労力を費やそうということには賛同してはくれないような気がして、どんどん国土は衰退していくような気がします。ですから、私は、「人づくり」、特に「国土マインド」、あるいは「国土センス」づくりみたいなことをしっかりやっていく必要があるのではないかと考えています。

子供が安全に遊べる場所をつくっていくことが大事。

私はこの数十年の間に国土の中で一番減っているのは、子供だけで安全に遊べる場所ではないかと思っています。大人が引率して行けるような場所は意外とあるのではないかと思うのですが、子供が独自に遊べる場所、昔は道端とか原っぱとか河原とか里山と言われたような所はなくなってきているのではないか。ゴルフ場のような大人が遊べる場所がどんどん増えてきたのに対して、子供が子供だけで遊べる場所はものすごく減ったかなと思うのです。

子供の遊び場は、子供が育つために必要であったと思うわけです。人生の中で十数年、使う場所が、他の機能的なものを作る過程の中で減ってきた。それが、子供が非常に大きな問題を持って、教育改革だけでは何ともならない所まで来てしまった原因だと思っています。子供の育つ場所、子供の遊ぶ場所は、国土の中で必要な機能だと思っています。これをちゃんと作っていくことが実は非常に大事で、今では河原くらいしかないのかなと思うのですが、子供が遊べる場所をつくっていくということもきちんと考えていただきたいということを強く感じました。

- 中村 幸昭 委員（鳥羽水族館館長） -



将来の変化を見据えたうえで、人にとっての快適性を守っていく視点が社会資本整備には必要。

私たちが生きていく上で、誰でも幸せを考えるとと思うのですが、その幸せの条件は第1が健康、2番目が平和、3番目が自由だと思うのです。この3つなくして快適とは言えない。先ほどお話がありましたが、中部はモノづくりの拠点です。トヨタやホンダやシャープなど、日本の錚々たる企業があります。けれども、富の追求だけで幸せになれるのか。私は、ノーだと思うのです。経済的な富の追求もいいけれど、もっと精神的な癒しやゆとりのある生活ができなければ幸せにならないと思う。

日本の大手企業は全体では1%に過ぎません。99%は中小企業です。その中小企業の多くは、特に関西あたりでは経営が困難となっています。失業者も多い、経営者の自殺者も増えている、リストラも多いということで戦々恐々としているのが、日本の企業の実態なのではないでしょうか。中部の場合、確かに景気はいいでしょう。しかし、例えばシャープの亀山工場を見に行きましたが、シャープは日本ではトップ企業なのですが、国内・国外の競争が激しく、将来はどうなるかというふうなことを憂えています。また、トヨタにしてもホンダにしてもそうですが、1兆円以上利益を上げているけれど、この中味を見ると国内消費は少なく、アメリカ等の海外での売上が過半数を占めています。

そのような状況を考えると、万博が終わった後の、ポスト万博後ということを考えておかないといけない。松尾先生の持論ですが、社会資本を長期で考えるときには100年先を考えなくてはならないということになります。例えば、先ほど新幹線の話がありましたが、10年後にはリニアができてくるということです。東京・大阪間を500km/h、たった1時間、名古屋から東京まで40分、名古屋から大阪まで20分で結ぶ時代には、どのような交通アクセスの問題が生じ、どうやって人間の快適性を守るかということに焦点を当てた議論も今の段階から進めていく必要があるのではないのでしょうか。

中部地方がアジアから見て魅力ある観光地になるための長期戦略を考える必要がある。

観光について申し上げます。万博は半年間で終わります。中国へ行きますと、蘇州や上海の市長は愛知万博に行った後の中部の観光コースを設定してほしいと言っています。例えば、須田座長が仰っておられる産業観光でも、いろいろなルート設定があると思うのですが、中国の方々にアンケートを取りますと、日本に来て温泉にゆっくり入ってみたいという方が一番多い。次に多いのが、本場の真珠を見たい、という方々。そして、富士山を見たい。京都・奈良へ行きたい。それから、工場は車の工場もあるけど、世界一のロボット工場を見たい、というような注文があります。さらに、今までは伊勢神宮なんか見向きもしなかったのですが、神宮も行ってよかった。刺身は食べなかったけど、刺身も食べられるようになりました。日本の畳に布団で寝てもよい。こういうふうになんか変化が出てきました。このようにアジア各国から多様な日本観光ニーズが生じ始めているところでして、アジアの方々が特に中部圏に来たときに、どういうルートで、どういう方法で快適さを味わうことができ、好印象を持ってリピーターとして来てもらえるかという戦略を長期的に考えていかなければいけないのではないのでしょうか。

- 東 恵子 委員（東海大学短期大学部教授） -



中部の地域内での情報交換と地域全体のマネジメントの双方が必要。

中部は日本全国の中でも美しいお水に、美しい食材、美しい風景に恵まれている地域です。特に、何よりもこの地域の持ち味は、温暖な気候であり、これによって年中ゆったりと過ごせるということだと思いますが、こういった中部地域の特長を皆で見つめ直し、いかに外に発信するかが、今後とも重要ではないのでしょうか。

しかし、私はいつも申し上げているのですが、私たちの地域がいかによい所かということを私たちがお互いに知らな過ぎる。名古屋が大きな都市として拠点であり、岐阜、三重、静岡があるわけですが、そういったこの地域の情報が交換されていないことに大きな問題があるのではと思っている次第です。特に、景観や観光という分野では、地域の魅力・個性ということが非常に重要なのですが、自分たちの魅力、宝となるものは、他の地域のことを知らないと分からない、またそれを磨くこともできないと私は思うのです。そして、インフラ整備をするときには、地域全体のマネジメントをどこかで行なわなければならない。地域の特徴づけをそれぞれの地域が頑張るのはそうなのですが、それを大局的にマネジメントしていくこともどこかで進めていく必要があるのではないかと思う次第です。

地域における日常性と非日常性をともに育てていく視点を持つべき。

観光という観点では、日常性と非日常性をともに育んでいく視点が重要ではないでしょうか。つまり、地域の人にとっては日常的な、自分たちの価値を作り育て、そして、外から来た人にとっては地域の日常性が非日常性となっていることが大事だと思います。観光地と一言で言っても、地域によってそれぞれ観光の形が違います。たとえば、コートダジュールでは、日本のバブル期のリゾート地のようなものではなくて、長期滞在型のリゾート地としてヨーロッパの人たちが訪れるようになっていきます。またニースのような街は、美しい景観、町並み、美術館があるだけではなくて、そこに庶民的な生活があるからこそ、そこに滞在する魅力が生まれるのだと思います。中部の観光地においても、生活感のある、暮らしをデザインするという視点のある地域づくり、まちづくりが必要だと思っている次第です。

今後はデジタル化がさらに進みます。静岡の中でも多局チャンネルの中でそれぞれの地域が紹介されているのですが、中部全体での放映というのはないわけです。デジタル化が起こりますと国際発信もできるわけなのですけれども、中部としての力や活力を押し進めていく上では、産業はもちろんですけれども、情報発信、交流といった意味でのインフラ整備があってもいいのではないかと思います。

- 水尾 衣里 委員（名城大学助教授） -



中部地方の発展は中部らしい独自の尺度で測っていくことが大事。

この地方の大きな特徴として、充実した都市機能と豊かな自然、快適な生活環境があると思うのですが、2005年以降もこのイメージを核として発展していく方向なのだというふうに感じております。その中で、この地域が目指していくのは、東京や関西という形の大都市ではなくて、中部地域ならではの都市化といえますか、中部地域独自の発展の仕方だと思います。そのような方向を求めてこの「まんなかビジョン」を構築していく必要があると思うのですが、そのときに重要なのは、中部地方の発展を関東や関西と同じ尺度で測らないということだと思います。これからのビジョン、そして、10年、20年、30年、短期から中期、長期にわたって、独自の成長プロセスを何で測るのかということも議論しておく必要があるのではないかと思います。これまでにあった尺度の延長線上にある測り方では収まりきらないようなビジョンを持つべきであるし、この地域が何をどのように評価するかということも、ここできっちり決めておく必要があるのではないのでしょうか。

新しいインフラ整備を契機として周辺地域と連携していくことが必要。

産業についても、観光についても、「広域」や「連携」という言葉が出てくるのですが、言葉だけではなくて、具体的にどうするのかということも提案したらいいと思います。たとえば、この「まんなかビジョン改訂版」37ページに「中部の豊かな自然環境、歴史、文化」とありますが、この地域で東海北陸自動車道が完成いたしますと日本海側と太平洋側をつなぐとても重要な幹線ができます。36ページに白川村の写真が載っていますが、ここは中部と言いながら、もはや北陸のイメージも大変強い地域であるということで、北陸を中部地方に具体的にどう取り込んでいくのかということも含めて考えるべきではないかと思います。

同じページに、海外の人が訪れたいと思っている日本の地方で、北陸も中部も大変低迷してい

ると出ていますが、この地域は観光のポテンシャルは大変高いところでありますから、両方が協力して観光地域として発展していくことは十分考えられる施策ではないかと思うわけです。中部地方としては北陸に対して出しゃばり過ぎるのではないかというイメージがあるかと思えますけれども、文化というのは大変大きなボーダーをすんなり越えてくることができるものであります。ですから、観光を一つのキーワードに、文化交流、そしてそれを支えるインフラ整備を進めていき、さらに、このインフラを上手に活用することによって具体的な広域や連携を提言していったらいかかかと感じた次第です。

- 須田 寛 委員（東海旅客鉄道（株）相談役） -



万博を契機として、産業観光を活かした全国各地との広域的なネットワークを広げるべき。

委員の皆様のご意見をいろいろ伺いましたが、観光ないしは産業のご意見がたくさんございました。やはり今観光が出てきますのは、来年、万博がありますので、万博の関係で観光の雄大なチャンスですから、これを活かさなくてはいけないということで観光が注目される。また、産業というものはこの地域の基幹でございますから、この2つが出てくるの

は当然だと思います。

そして、私は、その2つを結ぶものとして産業観光というものがあるように思えてならないわけです。産業があってこそ成り立つ観光ということですが、工場見学や古い産業遺産の研究はこの中部地方でなければできません。さきほど、学ぶ観光というお話もございましたが、これも産業観光だと考えています。

全国のいろいろなところで産業観光を始めていますから、ぜひとも、万博を機会に産業観光の波を起こして、それこそネットワークを組んで、広域連携をして、観光の輪を広げてまいりたいというのが私の私見でございます。

- 座長とりまとめ（須田委員） -

それでは、私なりの要約を以下に申し上げます。

【産業】

一言で申し上げますと、皆様方のご意見はバランスの取れた産業構造を指向すべきではないかというふうにまとめられると思います。

すなわち、当地域の経済はあまりにもトヨタに頼り過ぎているのではないか。もっと皆で分担すべきではないか。特に金融・流通関係については、いろいろ改善の余地があるのではないか。

また、産業クラスターの展開等もまだまだ十分ではないので、これからやっていくべきではないか。そのためには、既存施設を有効に活用すると同時に、もう少し外資導入という観点があってもいいのではないかというようなご意見がございました。

【観光】

これから成熟社会に入っていくと、どうしてもゆとりのある社会が必要になってくる。その中で、やはり観光というものが非常に重要な意味合いを持つので、産業と並んで「テイクオフ中部2005」の中でも柱として取り上げるべきだというご意見がございました。

特に、観光ポテンシャルの高い北陸と中部のいわゆる広域連携の必要性。それから、学びの要

素を取り入れた学習観光があってもいいのではないか。

一方、地域間において情報が十分に交換されておらず、広域観光が十分おこなわれていないというご指摘もありました。

人材育成に関連して、国土マインドというものを養成することが観光の基本ではないか。また、その国土マインドの中には周囲の環境に対する美的なセンスが尊ばれるのではないかというご意見があったかと思えます。

【まちづくり・地域づくり】

地域のマネジメントを担うところがあるべきではないかというご意見がありました。考えてみますと、我々の役割のような気もしますが、いずれにしても地域のマネジメントを大局的に考えるところがどこかにあってもいいのではないのでしょうか。また、関東や関西と同じ尺度で捉えるのではなく、中部独自の地域づくりをやっていくべきだというご意見もございました。

まちづくりについては、名古屋における都市としての集積を考えて、名古屋の拠点性を強化していくべきじゃないかというご意見がございました。

また、各拠点都市の特化と拠点都市間のネットワークが必要である。すなわち、各拠点都市が有する専門的な特色を際立たせるとともに、拠点都市を結ぶインフラを作ることによって、拠点都市間の連携が広域的に展開していくことが特に重要だというご意見があったかと思えます。

【社会資本整備】

以上のような話の中で、インフラの重要性ということが浮かび上がってきます。民が活動するための基盤整備がインフラとして必要なのだということでありまして、広域連携のあり方を規定するのは結局インフラなのだ。その意味においてインフラの重要性はこれからも変わらない。

また、この地域は多くのインフラが整備されてきているので、今後はもう必要ないかというところというわけではない。まだまだ不十分なところがたくさんあるので、そういう所を重点的に整備していくべきではないかというご意見もございました。

他方、交通インフラにおける快適性ないし快速性を再評価すべきであるというご意見がありました。同時に、地域づくりとして高速性をどう受け止めるべきか。ストロー効果が出ないようにするとか、人の流れの受け止め方、受け入れ態勢も重要ではないか。それが地域づくりにつながっていくのではないか。インフラについてこのようなお話があったと理解いたしました。

【その他】

全体的なお話といたしましては、ポスト万博をもっと真剣に考えなければいけない時期が来た。ポスト万博をどう考えるべきかという問題提起がありました。

一方、名古屋や中部の産業は強いと言われているが本当に強いのか。もう一度反問してみる必要があるのではないか。という非常に厳しいご意見もございました。

他方、「テイクオフ中部2005」の中では、具体的な地域の成功事例を取り上げて、我々のこれからの針路の参考にすべきではないかというご提案がありました。

以上